

黄門様は牛肉が大好き 保存施設も用意していた

徳川光圀みつくにといえば、人気時代劇「水戸黄門」で何々かか大笑する光圀の姿は我々にも親しい存在である。

もちろん実際は、全国漫遊をしていないことは、周知の事実。しかし漫遊譚たんが生まれる素地は十分にあった。

藩内をくまなくまわって視察を重ね領民に慕われたり、自身三回も蝦夷地に渡航したことや、『大日本史』（一六五七年に作り始め、完成したのは何と一九〇六年という全三九七巻の大作）の資料探求のために、安積寛兵衛あさかかくええ（格さんのモデル）、佐々介三郎さつきすけさぶろう（助さんのモデル）を全国に遣わした史実が核となって、このストーリーができたのである。

庶民も貴人が身分を隠して、ここぞというときに窮地を救って去っていくという話に快哉かさいを叫んで、さらに伝承を膨らませていったのだ。

あまり知られていない光圀の事績に、日本で初めて古墳の発掘・保存を行ったことがある。一六九二年に栃木県湯津上村ゆづかみにある前方後円墳の侍塚古墳を発掘し、鏡、鉄、鍬くわ、土師器などを出土している。

さらに、この黄門様、実は大の牛肉好きだったそう。



小菅桂子氏の『水戸黄門の食卓』によると、水戸家には大村加トかぼくという外科医でもある刀鍛冶がおり、この加トが薬食いと試し切りのために牛を飼っていたという。

ふつう試し切りは罪人の屍しかばねを用いるのだが、医者である加トは人間を切らないのが主義で

あった。

牛の骨は人間のものの十倍の硬度を持つという。

ならば刀鍛冶として、これに勝るものはなかったろう。

加トはその牛肉を水戸家に献上し、光圀はこれを好んで食したという。

光圀は屋敷に保存用の氷室を用意し、いつでもおいしい牛肉を食べることができたのである。